

「いごち」と若者たち

第一回

居心地研究所代表 安原喜秀

対立も医療、介護福祉も、社会のシステムまでも……「いごち」が気になってくる。

とにかく自分から始めるしかない迷走につく迷走で、なんとも情けない話なのだが、ここはひとつ恥をさらして、掴んだ断片をもとに、「いごち」の面白さを読者と楽しんでみたい。

このころではいき（粹）な人もいなくなつて、「あんないきなことをしやがつて」、なんていう言葉もあまり使われなくなつたが、そのいきについて書かれた名著「いき」の構造（丸鬼周造著）がある。日常にみる、ほんのちよつとした身振りや信条や生き方のなかに、共通のものを見出そうとしていくところに惹かれる。

私の力量ではとても及ぶべくもないのだが、私はいつか「いごち」について、「いごちの構造」というようなものを著してみたいという夢を抱き続けてきた。人の「いごち」の多種

「いごち」の話をしたいと思います……。

というと、真つ先に返ってくる反応は、「なんのいごちですか？」である。

そう、世の中には「いごち」が気になることがやまほどある。街のなかを歩いていても、電車のなかでも「いごち」の悪いことは多い。ひよつとして家庭のなかまでも。

反対に「いごち」のいいのはさしずめ温泉、こたつなどがすぐにあげられるだろうか。

多様なバリエーションから、誰にも共通の、骨格のような構造のすがたがつかめないかと。

かたちにはあらわれない、他人からもみきわめがつきにくい、となると「いごちの構造」は至難の業かもしれない。しかしそのはるか遠くの地点が、私にとつての目標である（どうしてそれを思うのか謎であるが）。

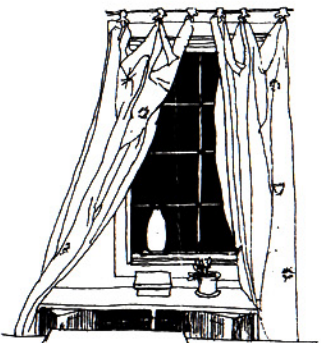
はじめにひとつお断りしておこう。

「いごち」をこのように「いごち」と書くのは、平仮名がやさしく親しみやすく感じるためである。ほかの平仮名と一緒にならないよう、「い」をつけることにする。また、これこそ、いま私がまな板ののっけているものですよ、という意味もこめている。漢字では「居心地」と書く。これはそれほど古くはないようである、そのことについてはいずれ述べよう。この「居心地」は、いい年をした大人でも、とつ

多々あるそんななかで、ここでは

「なんのいごちか」を決めずに、「いごちってなんだろう」と考えてみたのである。「いごち」そのものに正面から向かってみたらどうなるのか。この相手は一見まったく雲をつかむようなので、随分無謀といえは無謀。

しかし取りつかれて、気がつくところ十数年経つ。何をやっても何を考えても知らず知らず「いごち」の洞窟へとひきこまれていた。自分のしていること、教育も研究も設計もみんな行きつくところは「いごち」。国家間の



え・安原喜秀

さの場合には読めない場合もある。

私は「いごち」も「居心地」もどちらも使おうと思っている。気分次第である。というとおしかりをうけるかもしれないが、ことがことなので、私の気分を大事にしたい。

さて、誰でも人は「いごち」が気になつている、だが、では「いごち」そのものをどのように考えたらいいだろう、となると詰まってしまう。

日常生活ではそんな余裕もなければ必要もない。それでも人は、それぞれの「いごち」観を持つ。私はそれらに接し、とても多くを教えられてきた。たとえばそのひとつ。

近年、大学院でも「いごち」の研究をみとめてくださつて、私はそこでその研究に関心をよせてくる若者と出会う。印象深いのは、若者がいつも「いごち」を気にしている姿である。彼らにとつて、自分が「いごち」いか悪いかが問題である。あくまで個人的な「いごち」にだけ関心を持つ。他者が自分のなかにいない。まわりも全部自分。孤独のまったなかで踏ん張る自分がいて閉塞感にみちている。若者の特徴といえはいえるかもしれない。

彼らの「いごち」は「私のいごち」であつて、「私とあなたのいごち」。「私たちのいごち」からは距離がある。そんなことを教えられる。